

南方（ビルマ）

栄光の戦

福岡県 中村 康 夫

まえがき

昭和十二年九月十四日、充員召集により輜重兵第十二連隊に編入され、十一月八日門司港出帆、战友と共に中支そして南支にと行動をしてきた。しかし広東に入城するや間もなく昭和十四年一月二十四日広東第二野戦病院に入院、三月三十日には現地を出発し内地に帰ったので戦地としては一年四カ月の短い期間である。

その間の西湖会の思い出には、いろいろあるけれど

もこれらについては紙面の関係にて战友にお願することとする。また、幸い、労苦体験記は軍隊時代のこと、現在のこと、将来のこと等、何でも結構といわれており、私は大東亜戦争の経験が長く、しかもその思い出も多いのでこれらを中心に記載することとする。

一、召集及び復員

久留米陸軍病院を退院後一年四カ月を経過し二回目の召集を受けたのが昭和十六年十二月十六日、久留米歩兵第一四八連隊で、第三大隊本部付弾薬班であった。

翌昭和十七年二月十一日門司港を出帆し、三月三日ビルマのラングーンに上陸、その後ビルマルート（滇緬公路）を北上して中国雲南省に入り、ワンチン、芒市、龍陵、拉孟、騰越を通過し、最前線の高黎貢山系の瓦甸橋頭、冷水溝、橋頭街等の激戦地区などが長期

間を占め、昭和二十一年六月十三日浦賀港に上陸復員となった。

二、行政班の編成

最前線において部隊は怒江の防戦のため冷水溝正面の各要衝を確保し、主要陣地を死守することとなった。長期的物資確保のために農業技術指導の経験者をもって行政班が編成され、児玉中尉を班長に班員八六名が現地人の農作物の管理指導及び生産物の確保にあたることになった。私は県庁勤務の職歴があつたので台湾出身の張通訳と共に毎日のように山間地に避難している住民に部落に帰るように説得に廻つた。敵の偵察に数回遭遇したが、張通訳の面接と住民の信頼により難をのがれることがしばしばあつた。

このようにして農民は安心して農業に従事すると共に、行政組織を確立することができた。しかし反面行政班のある橋頭街を中心に主要道路三個所に陣地をつくり、敵の後方攪乱、襲撃にそなえ警戒にあたる。

三、班員・敵大集団に包囲孤立

昭和十九年五月十一日夜、中国軍は急流怒江を米軍

の指導をうけつつ渡河した。そのため前線及び後方ビルマルートの南北から進撃し、北方では騰越を、南方では平蔓、拉孟にいたるところから進撃して友軍陣地も各地に激戦苦闘がつづき、第一四八連隊も前線より後方に増援に出発、わが行政班はそのまま橋頭街を守備することとなり、当日より友軍には悪戦苦闘の日々が続いた。

住民は翌日から毎日避難し始めたので、児玉中尉(班長)と打ち合わせて張通訳を尋ね情報をさぐつた。

一〇キロ程山奥の部落に着いた時、顔見知りの住民から、

「明朝は橋頭街部落を大集団軍で攻撃するから、住民は即刻避難するよう密偵より連絡があつたのとのこと。シーサン(先生)も早く帰らないと危険です」と注意されたが、それは敵のデマだから心配しなくて農業に励むよう奨め、時刻も午後六時頃となり、日も暮れかかったので、急ぎ班に帰りその旨報告した。

不寝番には特に警戒を嚴重にするように伝えて、午後十時頃についたが、一時間も過ぎないうち、不寝番

より連絡があり兎玉中尉と共に状況を聞いてみると、六キロ程離れた部落で犬が盛んに吠え、そして裏山の山道を火のついたタイマツをもった人影が部落に近づいてくるのが見えた。

約三十分続き、犬の遠吠えも止み、静かになった。

その部落は直線にして三キロで宿舎との中間に幅二〇メートル、水深一メートル程度の川が流れており、さらに三キロ上流に部落へ通ずる、幅二メートル長さ二〇メートルの架橋があるので、班長と相談し当番と二人で敵状偵察に行くことになった。

護身用にピストルのみ携行し夜十二時頃出発。第一の難所は吊橋で橋の入口に歩哨を立てているのか、出口かいずれかに立哨しているに違いないと思い、嚴重に周囲を警戒しながら入口付近まで進んだが敵はいない。続いて橋が板張りのため足音に注意してほとんど渡り終わる頃出口の状況を監視すると、歩哨一人が石にかけながら寝ているようである。当番兵に周囲を警戒させ一人であることを確認して、ピストルを顔にあて手で口を閉じたところ何の抵抗もなく意のままにな

ったので、早速班に連行して調べた。

ところが予想通り早朝には五万の大集団軍が陣地を攻撃すること。調べが終わった頃に三個所の陣地に攻撃が開始され、銃声、突撃ラッパ十五分位で静かになった陣地の戦友は皆玉碎である。多勢に無勢、実に残念至極で、ただ玉碎した戦友の冥福を祈るのみである。

これからは行政班員の死守であり、兎玉中尉は残る兵力一八名に次のことを伝えられた。

一、警戒を嚴重にすること

二、一発必殺、必ず接近するまで待つこと

三、手榴弾一個は必ず玉碎寸前まで持つこと

三陣地の戦友が玉碎後のこと、残った戦友一八名は、よし玉碎するまで頑張るぞと固い握手をしながら宿舎の周囲の警戒にあたった。翌日からは迫撃砲弾が大地をゆるがすように落下するので、防空壕を一層強固にし、その中に負傷兵を寝かせ、監視員は昼五名、夜五名を宿舎の周囲に立たせ壕を強化しながら警戒に当たる。

炊事は普通の白米はなく粳のまま、負傷兵も含めて監視員以外は全員各自の鉄カブトの中に粳を入れ、丸棒を使って殻をとり除き、黒米を集めて壕内で炊き始めた。

ところが煙が出るのでこれが目標となり迫撃砲弾が飛来し、壕の一部は振動により破れ、遂に炊くことを断念して黒米のままお互いに食した。

幸いにして前回の白兵戦で敵は大きな損害をうけたためか、五日間は迫撃砲弾を午前中に約五〇発、午後にもほとんど同程度打ち込んできた。迫撃砲弾は壕を掘りその上に厚板を二枚ほど重ねた屋根を築けば板に直撃うけてもほとんど負傷することはない。ただ陣地攻撃の場合に一番おそろしいのは飛行機と迫撃砲であった。

敵の攻撃は毎日続き、弾薬も残り少なくなったので、兎玉中尉は負傷者を含む一六名全員を集合せ、次期敵襲の時はこれが最後だ。手榴弾一個は自決用に各自所持すること。そして最後まで戦い無駄死は絶対になぬようにと指示され、各自肝に銘じて覚悟を新たにし

た。

敵の攻撃は毎日繰り返し行われたが、わが方は陣地構築を堅固にし、勇猛沈着に応戦するので、いかなる敵大集団軍にも橋頭街は奪還されず、三十二日間の部隊帰還まで守備しつづけた。

四、わが部隊の帰還

敵集団に包囲され全滅せんとする部隊を救出し、三十二日目に敵を撃退しつづつ橋頭街に帰った。

その日、真昼に堂々と宿舎に接近する農民がいた。近距離まで引き寄せ誰かと呼べば、今里と返事した。双方とも驚いた。今里曹長は、農民に変身し、橋頭街に現状調査に先遣されたもので、おそらく敵集団軍本部があるだろう橋頭街は全滅と予想されていたので、本部にこれを早く連絡しなければ、友軍から攻撃されると言つて、双方無事を喜びあいながらも即刻連絡に帰った。

夕刻には部隊が到着するだろうと、迫撃砲弾も何のその、付近の大樹によじのほり、日章旗当番と二人で敵状偵察に行くことになった。

護身用にビストルのみ携行し、夜十二時頃出発。第一の難所は吊橋で、橋の入口と出口のいずれかに立哨しているに違いないと思ひ周囲を警戒しながら入口付近まで進んだが敵はいない。さらに橋が板張りのため足首に注意して渡り終わる出口では歩哨一人が石にかけながら寝ているようである。当番兵に周囲を警戒させ一人であることを確認して、日章旗を高々と掲げた。夕刻には部隊が到着するだろう。その友軍の迫撃砲彈、重機関銃の銃声が、徐々に近くなり、同じに橋頭街を包圍した敵大集団軍も怒涛のごとく多くの将兵が兵器を放棄し、われ先にと敗走した。この勇猛果敢な奪還作戦によって、わが行政班も無事救出された。

ビルマ派遣軍龍兵団（第五十六師団（六七〇三）一四八連隊（歩兵）（六七三六）第三大隊 中村康夫

五、龍部隊慰靈祭の実施

終戦後ビルマ派遣軍の帰還者をもって組織された旧八女郡（八女市・筑後市を含む）において「八女雲龍会」を組織し、第一四八連隊長以下騰越守備隊員の玉砕日の九月十四日前後の日曜日に、戦友約一〇〇名の

御遺族を案内し、毎年かさず慰靈祭を行い、亡き戦友のご冥福をお祈りし、加えてお互いの健康を祝しあっている。

【解 説】

「栄光」とは第五十六師団（龍）が雲南へ進出、滇緬公路を圧え、昭和十九年以降は米支連合、雲南遠征軍と寡兵克く戦い、多くの守備隊を玉砕させつつも昭和二十年五、六月迄最後の殿軍とし要衝を確保し戦った師団の誇るべき「栄光」を意味したのであろう。

第五十六師団の怒西（サルウィン河）地区防衛のための基本兵力配置は水上歩兵团長指揮の歩兵第一四八連隊基幹の部隊を騰越方面に、歩兵第一一三連隊基幹を拉孟、龍陵、芒市を含む滇緬公路に沿う一帯の地区に、歩兵第一四六連隊の一個大隊を平戛に夫々配置すると共に、師団長の反撃機動予備兵力とし歩兵第一一六連隊主力基幹を蜿丁付近に配置するというものであった。

従って昭和十九年五月中旬、雲南遠征軍が反攻開始した時の兵力は配属部隊を含み歩兵六大隊（二個連隊

半) 基幹に過ぎなかった。欠部隊は、1. 第十八師団に増援した兵力 2. ミートキーナ守備隊増援兵力 3. パーモ公路の警備に充当した兵力である。

昭和十九年五月現在の第五十六師団の編組は次の如くである。

第五十六師団司令部、歩兵团司令部、歩兵第一一三、一四六、一四八連隊、搜索、野砲兵、工兵、輜重兵の各第五十六連隊、第五十六師団通信隊、兵器勤務隊、衛生隊、第一、二、四野戦病院、病馬廠、防疫給水部であるが、多数の兵力をフーコン、ミートキーナ方面に転用された師団は、雲南遠征軍の反攻時、主として怒江西岸要置に分散配置をせざるを得なかつた。

更にイラワジ河沿い、ミートキーナ、パーモにも兵力を配備し、師団司令部と一個大隊を芒市に、二個大隊を龍陵、歩兵一四八連隊(一大欠、山砲二中属)は一部をもって橋頭街東方地区の渡河点を、また主力をもって大塘子北東地区の各渡河点を制扼し、まず敵の半渡に乗じて攻撃し、次いで高黎貢山系の要衝を占領

して敵を阻止する。

歩兵第一一三連隊(二大欠)は拉孟北方地区の主要渡河点を制扼し、まず敵の半渡に乗じ、次いで高黎貢山系の要衝に扼つて敵の進撃を阻止す。拉孟守備隊は既設陣地を占領して滇緬(雲南ビルマ)公路を遮断す。

平戛守備隊は平戛付近の既設陣地を占領して敵の芒市方面に向かう前進を阻止する。クンロン(怒江下流)守備隊(搜索連隊主力)は付近を占領して敵のセンウイ(ラオシ北々東三〇キロ)方面に向かう前進を阻止するとともに、できる限りの有力な兵力で出撃して当面の敵を牽制抑留する。

拉孟北方新成付近の配備についた歩兵第一一三連隊第二大隊は新たに師団直轄となり、龍陵付近に転進して同地に兵力を集結する。師団予備隊たる歩兵第一一三連隊第三大隊は芒市付近の要点を占領し、その他の後方諸部隊は軍需品集積所の警戒に任ずる。

怒江上流配備地区から下流クンロンまでの延長は約三五〇キロであり、遠征軍の兵力は、第一一集團軍から三個団(連隊)の増強を受けた第二〇集團軍であり、

第一次反攻は大塘子方面第二二師団基幹、冷水溝方面二個師団基幹であり、一一集團軍の二個師団は平婁に侵入企画、クンロン正面に新編第三三師団が陣地前面に進出して来た。

よって、第五十六師団は先ず第二十集團軍を各個に撃破すべく果敢な攻撃を開始し（五月十二日以降）、反攻軍を撃退した。第二次反攻は六月一日一斉に怒江を渡河、主攻勢を滇緬公路東側地区に指向して反攻開始である。

龍陵守備隊に対し敵は二個師団を指向し、第一次は六月五日で守備隊は苦闘したが、師団は松井部隊をもつて龍陵北方地区の敵を攻撃しこれを解囲させた。更に拉孟・平婁・上街守備隊も夫々悪戦苦闘した。

七月二日夜半、南方軍はインパール作戦中止を方面軍に命令、フーコン方面の第十八師団は八カ月に亘る苦闘の末、七月上旬、第五十三師団（安）主力に収容された。インパール作戦の成功を待ち望んだ第五十六師団も遂に力尽き、拉孟、騰越、平婁の各守備隊を孤立させたまま龍陵付近の戦線を縮少しなければならな

かった。

また、フーコン方面に派遣した歩兵第一四六連隊主力はまだ師団に復帰していない。この状態で推移すれば敵中に孤立した各守備隊は玉砕の止むなきに至る窮状であった。

この二カ月間の反攻反撃作戦に参加した第五十六師団隷下、指揮下部隊の総人員は約二万一、〇〇〇名で、その損害は次の如くである。

戦死一、七一九、戦傷死不詳、戦病死約二、〇〇〇、戦傷一、二五七、戦病約四、五〇〇

これによれば師団の健康者は約三、〇〇〇名に過ぎず、兵員の七〇%が損耗、損傷したことになる。師団はその後約一カ年、戦闘と撤退を続け、傷だらけの「栄光ある戦」であった。